甲州市文化財調査報告書　第13集

宇賀屋敷遺跡

—個人住宅建設に伴う発掘調査報告書—

2013

甲州市教育委員会

甲州市文化財調査報告書　第13集

宇賀屋敷遺跡

—個人住宅建設に伴う発掘調査報告書—

2013

甲州市教育委員会

調査区全景（東から）

調査区全景（西から）

1号住調査風景

1号住居カマド

例　言

1．本書は山梨県甲州市塩山下於曽字宇賀屋敷1026番4に所在する宇賀屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査であり、甲州市教育委員会が調査を行った。

3．発掘調査の主体は甲州市教育委員会であり、発掘調査は入江俊行（甲州市教育委員会生涯学習課文化財担当）が担当した。

5．発掘調査は平成23年4月12日～5月31日、整理作業は平成24年4月～平成25年3月にかけて行われた。

6．本書の編集・執筆は入江が行った。

7．調査で得られた記録および出土遺物は、甲州市教育委員会が保管している。

凡　例

1．本書で図示した地図類は真上北である。

2．本書に掲載された図のスケールは統一されていないため、各図中に示したスケールを参照されたい。

3．本書第1図は国土地理院発行の1/50,000地形図「御岳昇仙峡」を、第2図は甲州市都市計画基本図（1/2,500）を改変して使用した。

目　次

巻頭カラー図版
例言
凡例
目次

第１章　経過
　第１節　調査に至る経過…… 1
　第２節　発掘作業の経過…… 1
　第３節　整理作業の経過…… 2
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 3
第３章　調査の方法と成果
　第１節　調査の方法…… 4
　第２節　層序…… 5
　第３節　遺構…… 5
　第４節　遺物…… 6
第４章　総括…… 7

図版
写真図版
抄録

図版目次

挿図１　基本土層模式図…… 5
第１図　宇賀屋敷遺跡と周辺の遺跡…… 8
第２図　調査区位置図……10
第３図　遺構配置図……11・12
第４図　１号住平面図・断面図……13
第５図　２号住、１号土坑、２号土坑、３号土坑平面図・断面図……14
第６図　１号溝、４号ピット平面図・断面図……15
第７図　２・３号溝平面図・断面図……16
第８図　出土遺物実測図……18

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表…… 9
第２表　ピット一覧表……17
第３表　遺物一覧表……19

第１章　経過

第１節　調査に至る経過

本調査区は塩山下於曽字宇賀屋敷 1026 番４に位置する。調査区のすぐ西側には塩山中学校が隣接し、東側は塩山南児童センターに隣接する。当該地一帯は埋蔵文化財包蔵地である宇賀屋敷遺跡の範囲と考えられており、平成４年には塩山南児童センター建設に伴う発掘調査が行われた。その時の調査成果によれば、竪穴住居跡６軒、掘立柱建物跡１軒、土坑１基が検出されており、平安時代の集落遺跡の存在が明らかとなっている。そして、平成 23 年３月、先述の地番に個人住宅建設の計画があり、埋蔵文化財包蔵地であることから工事に先立って試掘調査を実施した。当初、工事範囲内に長さ 10m、幅 1m のトレンチを設定し、遺跡の有無を確認したところ、地表から約 60cm 掘り下げた地点で、土器片などの遺物と複数の遺構の存在を確認したため、住宅建設工事により遺跡の破壊が想定される、約 216㎡を対象に記録保存を目的とした発掘調査を行った。

第２節　発掘作業の経過

発掘調査は平成 23 年４月 12 日から５月 31 日まで、約２ヶ月間に渡って行われた。調査体制は次の通りである。

調査主体　甲州市教育委員会

調査担当者　飯島泉・雨宮亨・入江俊行

発掘調査作業員　雨宮久美子・栗原礼子・栗原洋一・沢登淳子・萩原里江子・深沢茂子・正木なつ子

経過

４月 12 日　人力による試掘。遺物包含層・遺構を確認、本調査へ移行。

４月 13 日　重機の手配がつかず、中止。

４月 14 日・15 日　重機による表土剥ぎ

４月 18 日～ 21 日　ジョレンかけ、遺構検出作業。表土剥ぎの結果、遺物包含層には達していたものの、地山面には達していなかったことがわかり、人力で地山面まで掘り下げ、遺構を確認した。

４月 22 日　遺構掘削開始。東部から始める。（１～ 13 ピット、１溝）

４月 25 日　遺構掘削（１号住居、２号土坑）。１溝が深さ１ｍを測る断面Ｖ字形の溝であることがわかる。出土遺物は土師器、須恵器（灰釉陶器？）、溝底面から常滑（甕？）破片。少なくとも中世以降に埋め戻されたか？溝の年代は平安～中世と推定。２号土坑を切る。１号土坑断面図

４月 26 日　遺構掘削。１溝断面図作成、ベルトはずし。２号土坑断面図作成。

４月 27 日　非常に風が強い。１住、床面らしき硬化面を確認、その高さまでの掘削を指示。２土、ほぼ完掘。

４月 28 日　１住ベルトを残し、ほぼ掘りあがってきている。床面、壁面も確認。北面にカマド、その床面付近から土器片出土。２土完掘、写真撮影。底面がやわらかく、粘性の高い黒色土で地山ではなかったためさらに掘り下げた。断面形態や下層で砂が混じることから井戸跡と考えられる。

５月２日　１住セクション図作成。３土セクション図作成。調査区中央部の小穴掘削開始。

5月9日　1住ベルト外し。3土完掘・写真撮影。調査区西部遺構確認・溝遺構掘削開始。中央部の小穴調査ほぼ終了（検出漏れ除く）。ＴＳによる測量開始…調査区上端、1住上端など。

5月10日　2溝掘削　午後2時過ぎ、降雨のため中止。

5月11・12日　降雨により中止。

5月13日　1住、遺物出土状況写真撮影。ナンバー付き遺物取り上げ。床面小穴掘削。カマド調査開始。2溝ほぼ掘削完了。3溝掘削、1溝と同様の覆土、断面構造をもつ。同時代のものと考えられる。

5月16日　2溝・3溝断面図作成。溝・小穴の掘削。

5月17日　2溝・3溝完掘。全面清掃開始。1住カマド断面図作成。掘削。支柱石を検出。3時頃降雨により中止。

5月18日　カマドエレベーション図。調査区全体を清掃。1住の東側で遺構を確認。掘削開始。

5月19日　1住東側の遺構を2住とする。掘削。1住カマド下層断面図作成。遺構平面図をトータルステーションで作成。

5月20日　全体写真撮影。各遺構の完掘写真撮影。測量。現場機材片付け。トイレ汲み取り。

5月23日　プレハブ・トイレ撤収。

5月24日　測量

5月25日　測量、現場終了

5月31日　埋め戻し

第3節　整理作業の経過

整理作業は平成24年4月から平成25年3月まで、甲州市内の整理作業室において実施した。遺構はトータルステーションによる測量成果や手取りの図面をもとに整理を行い、遺物は洗浄・注記・接合・実測・写真撮影など一連の記録作業を行った。また、遺構・遺物とも図面・写真等の記録をデジタルデータに変換して保存し、近年、山梨県でも利用が開始された遺跡資料リポジトリへの登録に対応できるようにした。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

宇賀屋敷遺跡が所在する甲州市は、甲府盆地の北東隅に位置し、面積 264.01㎢、人口３万４千人の都市であり、平成 17 年（2005）11 月１日に塩山市、東山梨郡大和村・勝沼町の３市町村が合併して発足した。西は山梨市・笛吹市に、東は笹子峠を境に大月市に、また大菩薩嶺や大菩薩峠を境に丹波山村・小菅村に、北は笠取山、唐松尾山を境に埼玉県秩父市に接している。市域の大部分は山地であり、大菩薩嶺付近の山地を水源とする重川と日川が市域を流れ、共に山梨市一町田中付近で笛吹川に合流している。市域西部にあたる重川や日川の流域では扇状地が発達しており、モモ、スモモ、ブドウ、サクランボなどの果樹園地帯として利用されている。JR 中央本線塩山駅あたりを中心として市街地が周辺に広がっている。

宇賀屋敷遺跡はその市街地の一角である甲州市塩山下於曽字宇賀屋敷に位置し、周囲は住宅地となっている。市街地は笛吹川と重川により形成された扇状地上にあり、宇賀屋敷遺跡は塩川と重川に挟まれた微高地上に立地している。遺跡の周辺には、北側には国宝「小桜韋威鎧兜、大袖付」を所有する菅田天神社、北東側には中世の土豪屋敷とされる県指定史跡於曽屋敷などの文化財がある。

第２節　歴史的環境

宇賀屋敷遺跡が所在する下於曽は、上於曽と合わせて、律令期に設置された於曽郷の遺称と考えられており、旧塩山市域の大部分が於曽郷に含まれていたとされる。また、於曽郷は「和名類聚抄」によると、山梨郡十郷の一つで、郡を五郷ずつ東西に分けた場合は山梨東郡に所属していた。実際に於曽郷がどのような範囲で構成されていたのか、詳細は今のところ判明していないが、塩川と重川に挟まれた微高地上に立地する旧塩山市街地は上於曽・下於曽をはじめとして遺跡の包蔵地となっているところも多く、過去に発掘調査が行われた地点もみられる。以下に調査事例から概要を追ってみたい（第１図・第１表）。

甲州市内の調査事例は、道路建設などの公共事業に伴う発掘調査のものが大半を占めている。古くは昭和 50 年代の塩山バイパス建設に伴って西田遺跡、町田遺跡などの調査が行われている。

西田遺跡（37）は、塩山熊野に位置する古墳前期の集落遺跡で、塩山バイパス建設に伴う調査（１次調査）、塩山警察署新築工事に伴う調査（２次調査）、店舗新設に伴う調査（３次調査）と３次にわたって発掘調査が行われている。１次調査では、〈縄文〉土坑２、〈弥生後期〉竪穴住居１、〈古墳前期〉竪穴住居７、方形周溝墓５、土坑２、溝状遺構５、〈奈良〉竪穴住居１、掘立柱建物１、〈時期不明〉溝状遺構２が検出されている。２次調査では、〈古墳前期〉竪穴住居 54、溝状遺構６、土坑などが検出され、３次調査では、〈古墳前期〉竪穴住居４、〈中世〉掘立柱建物１、土坑６が検出されている。平安時代の遺構がみられないものの、縄文～中世にわたる遺跡であり、中でも数十軒規模の古墳前期住居跡からなる集落と、方形周溝墓などの墓域が両方検出されている点は注目される。

町田遺跡（58）は、塩山下於曽に位置する縄文時代の集落遺跡で、塩山バイパス建設に伴って調査が行われた。〈縄文〉竪穴住居８、溝、土坑などが検出されている。

少し時代が降って平成になると、塩山東バイパス建設に伴って、西畑Ｂ遺跡、下西畑遺跡、影井遺跡、大木戸遺跡、五反田遺跡、獅子之前遺跡などの調査が行われた。

西畑Ｂ遺跡（13）は、塩山赤尾に位置し、〈平安〉竪穴住居７、溝１、〈近世～近代〉道路遺構等が検出されている。

下西畑遺跡（14）は、塩山赤尾に位置し、〈縄文〉竪穴住居1、土坑4、〈古墳前期〉竪穴住居2、方形周溝墓4、〈奈良〉竪穴住居1、〈平安〉竪穴住居2が検出されている。

影井遺跡（19）は、塩山下於曽に位置し、〈平安〉竪穴住居3、〈平安～中世〉掘立柱建物などが検出されている。

大木戸遺跡（21）は、塩山下於曽に位置し、〈縄文時代〉竪穴住居14、土坑8、〈古墳前期〉溝1、〈平安〉竪穴住居20、土坑2、溝8、〈中世〉墓3などのほか、谷部から縄文～平安時代の遺物が検出されている。

五反田遺跡（22）は、塩山熊野に位置し、〈古墳前期〉竪穴住居6、竪穴状遺構3〈平安〉竪穴住居11が検出されている。

獅子之前遺跡（92）は塩山千野に位置し、〈縄文〉竪穴住居7、土坑、〈弥生〉土坑（墓？）、〈奈良・平安〉竪穴住居10、土坑、〈近世〉道路状遺構などが検出されている。

道路以外にも、県営熊野団地に伴い調査が行われた一ノ坪遺跡（43）は、塩山熊野に位置し、〈縄文〉竪穴住居2、土坑、〈平安〉竪穴住居5、土坑、竪穴状遺構3、溝5が検出されている。

近年では、塩山バイパスと塩山東バイパスとを結ぶ予定の市道下塩後22号線建設に伴って調査された梶畑B遺跡（45）がある。梶畑B遺跡は、塩山下於曽から熊野にかけて存在し、〈縄文前期〉竪穴住居1、屋外炉、土坑、〈古墳前期〉竪穴住居2、〈平安〉竪穴住居5、小穴多数。〈中世〉竪穴状遺構1が検出されている。

また、宇賀屋敷遺跡から比較的近傍に位置する於曽屋敷（5・6）は、中世の土豪屋敷とされ、発掘調査により堀、土塁、土橋跡が見つかり、二重の土塁によって囲まれていたことなどが判明している。この於曽屋敷の周辺には土豪屋敷跡が点在しており、中村氏屋敷（50）、風間氏屋敷（47）、依田宮内左衛門屋敷（53）、田辺氏屋敷（54）、池田氏屋敷（3）、宇賀屋敷（2）、於曽三郎屋敷（98）、橋爪氏屋敷（97）、深沢氏屋敷（33）、依田兵部左衛門屋敷（32）、保坂氏屋敷（12）など、県内でも高い密度で土豪屋敷が存在するという特殊な地域でもある。これらの土豪屋敷は、黒川金山で金の採掘・生産に携わった金山衆のものであろうとする説もあるが、いまのところ確証を得る段階には至っておらず、今後の調査や研究の進展が期待される。

以上のように概観すると、旧塩山市域では、縄文、古墳、平安時代の集落遺跡が多く分布していることが窺え、中世以降には遺跡の周辺で於曽屋敷などの屋敷群が形成されるなどの歴史的環境を備えた地域であるといえる。

第3章　調査の方法と成果

第1節　調査の方法

本調査区は塩山下於曽字宇賀屋敷1026番4に位置する（第2図）。調査区のすぐ西側には塩山中学校が隣接し、東側は以前発掘調査が行われた塩山南児童センターに隣接する。その時の発掘調査成果によれば、竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡1軒、土坑1基を検出しており、平安時代の集落跡と考えられた。

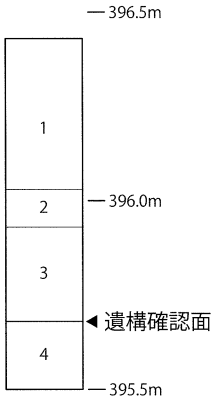
当初、工事範囲内に長さ10m、幅1mのトレンチを設定し、遺跡の有無を確認したところ、約60cm掘り下げた地点で、土器片などの遺物と複数の遺構を確認したため、住宅建設工事により遺跡が破壊される範囲、約216㎡を対象に記録保存を目的とした調査を行った。

調査方法については、重機で表土剥ぎを行った後、人力による遺構確認・遺構掘削を行った。記録方法

については、トータルステーションによる座標点記録および手作業による測量と、デジタルカメラによる写真撮影を行った。

第２節　層序

調査区内の基本層序を把握するため、調査区南壁の観察を行い、第１層から第４層まで分層した。第１層は表土であり、層厚は約 40cm で、現代のガラが含まれている。第２層は旧水田の床土と考えられる層で、色調は黄色がかっており、粘性は強く、層厚は約 10cm で水平に堆積している。第３層は遺物包含層となっており、層厚は約 25cm、土器片、石器片、瓦片などが含まれている。中でも平安時代の土師器片が包含層出土遺物の中で主体となっている。第４層はローム質の非常にしまりが強い無遺物層で、これを地山と判断して、本層上面を遺構確認面とした。



1．暗灰褐色土層　表土。瓦礫を少量含む。
2．暗灰黄褐色土層　旧水田層。しまり、粘性強。
3．暗灰褐色土層　しまりあり、粘性あり。土器片、礫、瓦片微量含む。
4．灰褐色土層　しまり強、粘性強。地山。

挿図１　基本土層模式図

第３節　遺構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡２軒、溝４本、土坑３基、畝状遺構３本、小穴 52 基である（第３図・第２表）。

１号住居跡（第４図）　調査区南辺に位置し、約 4.4m × 3.1m の長方形を呈し、床面までの深さは遺構確認面から約 50cm を測る。南側の一部は調査区外に延びる。北側の辺にカマドが付き、煙道は先端をピットにより切られるが、確認された長さは約 1.2m を測る。燃焼部には支柱石が残存していた。遺物は土師器甕・坏の小破片が出土している。

２号住居跡（第５図）　１号住居の南東に隣接し、規模は大部分が調査区外に延びるため不明であるが、深さ約 75cm を測る。住居内北西隅の１号住居と接するあたりに焼土が広がっており、そのあたりにカマドが構築されていたと考えられるが、１号溝に切られる。遺物は土師器甕・坏の小破片が出土している。

１号溝（第６図）　南北に走る直線的な溝で、幅約 1m、深さ約 60 ～ 80cm を測り、断面Ｖ字形を呈し、両端とも調査区外まで延びる。調査区南側で２号住居を破壊して構築されている。底面近くでは砂粒が堆積しており、水が流れていたことが窺われる。遺物は土師器、須恵器、陶器、灰釉陶器の小破片が出土している。

２号溝（第７図）　調査区の南辺から西辺にかけて弧状に走る溝で、幅約 60 ～ 70cm、深さ約 20cm を測る。両端とも調査区外まで延びる。遺物は土師器、須恵器の小破片が出土している。

３号溝（第７図）　調査区の西側に位置し、南北に走る直線的な溝で、幅約 0.5m ～ 1m、深さ約 40 ～

60cmを測る。断面はV字形を呈し、両端とも調査区外まで延びる。2号溝と1畝を切って構築される。底面近くでは砂粒が堆積することから水が流れていたことが窺われ、遺構の形態や覆土の特徴から1号溝との類似性が指摘できる。遺物は土師器、灰釉陶器の破片が出土している。

4号溝（第5図）　大部分が2号住居跡によって切られ詳細は不明である。深さ約20cmを測る。遺物は出土していない。

1号土坑（第5図）　調査区東辺に位置し、長さ約3.5m、幅約1mの不整長楕円形を呈し、深さ約30cmを測る。遺物は土師器、陶器の小破片が出土している。

2号土坑（第5図）　調査区の中央付近に位置し、径約1.5mの不整円形を呈し、深さ約1.6mを測る。断面は中位にゆるやかな稜をもち、漏斗形を呈する。遺構の形態から素掘りの井戸跡と考えられる。遺物は出土しなかった。

3号土坑（第5図）　調査区北側に位置し、径約60～80cmの不整円形を呈し、深さ約50cmを測る。遺物は出土しなかった。

畝状遺構　2溝付近で確認された浅い掘り込みをもつ溝で、3本確認した。約1.5mの等間隔で並ぶことから畝と判断した。1畝は確認された長さ約2m、幅約20cm、深さ約2cmを測り、3溝に切られる。2畝は長さ約2.8m、幅約10～20cm、深さ約3cmを測る。3畝は長さ約1.6m、幅約20～30cm、深さ約8cmを測る。遺物は出土しなかった。

第4節　遺物

今回の調査によって検出された遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、陶器、土製品、石器、金属製品などであり、大半が土師器となっている。これらのほとんどが小破片であり、図示できるものが非常に少なかったが、図示できた若干の遺物について触れておく。（第8図・第3表）

1は高坏の脚部である。坏部は残存せず、表面は摩耗が著しい。古墳時代前期のものと考えられる。調査区内からS字口縁甕の小片なども出土しており、古墳前期をひとつのグループとする遺物群の存在が指摘できる。ただし、今回の調査区内にこれらと関連する遺構は推定できず、周辺に古墳前期集落の存在を示唆できるにすぎない。遺構外出土遺物である。2は甕の口縁部である。口縁はくの字形に外反しており、9世紀頃の所産と考えられる。2号住出土。3は坏である。外面底部付近にヘラケズリの痕跡がみられ、9世紀頃の所産と考えられる。1号住出土。4は坏である。外面、内面ともにヘラミガキが施されており、内面の暗文は放射状である。8世紀後半頃の所産と考えられる。2号住出土。5は甕である。外面、内面ともに縦、斜め方向のヘラケズリが施されている。年代は判然としないが、平安時代の所産と考えておく。4号ピット出土。6は須恵器の甕である。外面にタタキ、内面に当て具の痕が残る。2号溝出土。7は須恵器の甕である。外面にタタキが残る。遺構外出土。8は灰釉陶器の碗である。ロクロナデが施される。3号溝出土。9は灰釉陶器の皿である。ロクロナデが施される。遺構外出土。摩耗が著しい。10は手づくねの土製品で、欠けた部分もあり、模造原体が不明であるが、欠けた部分から推測するにコップ状を呈していたと考えられる。突起をもつコップ状の形態か、反対側にも突起をもっていたとも考えられるが判然としない。器状の形態であったと想定し、ここでは手づくね土器としておきたい。1号住のカマド付近から出土。11は磨石である。石材は花崗岩である。1号住出土。12は銅製品である。半球形中空の製品で、孔が小さい方の延長部分が欠けており、全体の形状は不明である。仏具か。遺構外出土。

第4章　総括

調査の結果、竪穴住居跡が２軒（１・２住）検出したことから、当該地点が東側に隣接する塩山南児童センター地点で発見された集落の一部であることが確認された。いずれも９世紀代の住居跡と考えられ、出土遺物の年代からも矛盾は生じない。

２号土坑は遺物こそ出土しなかったが、おそらくは同時期に集落内で用いられた井戸跡と考えられる。また、畝状遺構の主軸方向が住居の主軸ともかなり近いことから、これも集落が営まれた時期と同時期のものと推定される。

１号溝は、２号住居を破壊して構築される。住居跡との主軸方向の相違や出土遺物の年代から、集落が営まれた時期よりも新しいものと考えられる。また、遺構の平面・断面形態や覆土が１号溝と類似する３号溝も、１号溝と近い時期の所産であろう。１号溝の底面からは常滑産の甕の破片が出土していることから、少なくとも１号溝が埋め戻された時期が中世以降と考えられ、平安期の集落が廃絶し、中世に入ると土地利用の改変が行われた様子が観察できる。また、当地の字名は宇賀屋敷と呼び、その周囲は於曽屋敷、田辺氏屋敷、風間氏屋敷など中世城館に囲まれている環境にあり、１・３号溝が、果たしてこのような屋敷跡と直接関わるような遺構であるのかは判然とはしないが、直線的な平面形態からは区画を意図したようにも考えられ、こうした遺構の性格については今後の検討課題である。

以上のように、今回の調査によって発見された遺構は、平安～中世の遺構であり、当地における平安時代の集落の存在と、集落廃絶後の土地利用の変化を窺い知ることができる貴重な発見であり、今後の調査によって平安集落と屋敷地との関係が、より詳らかになることを期待したい。

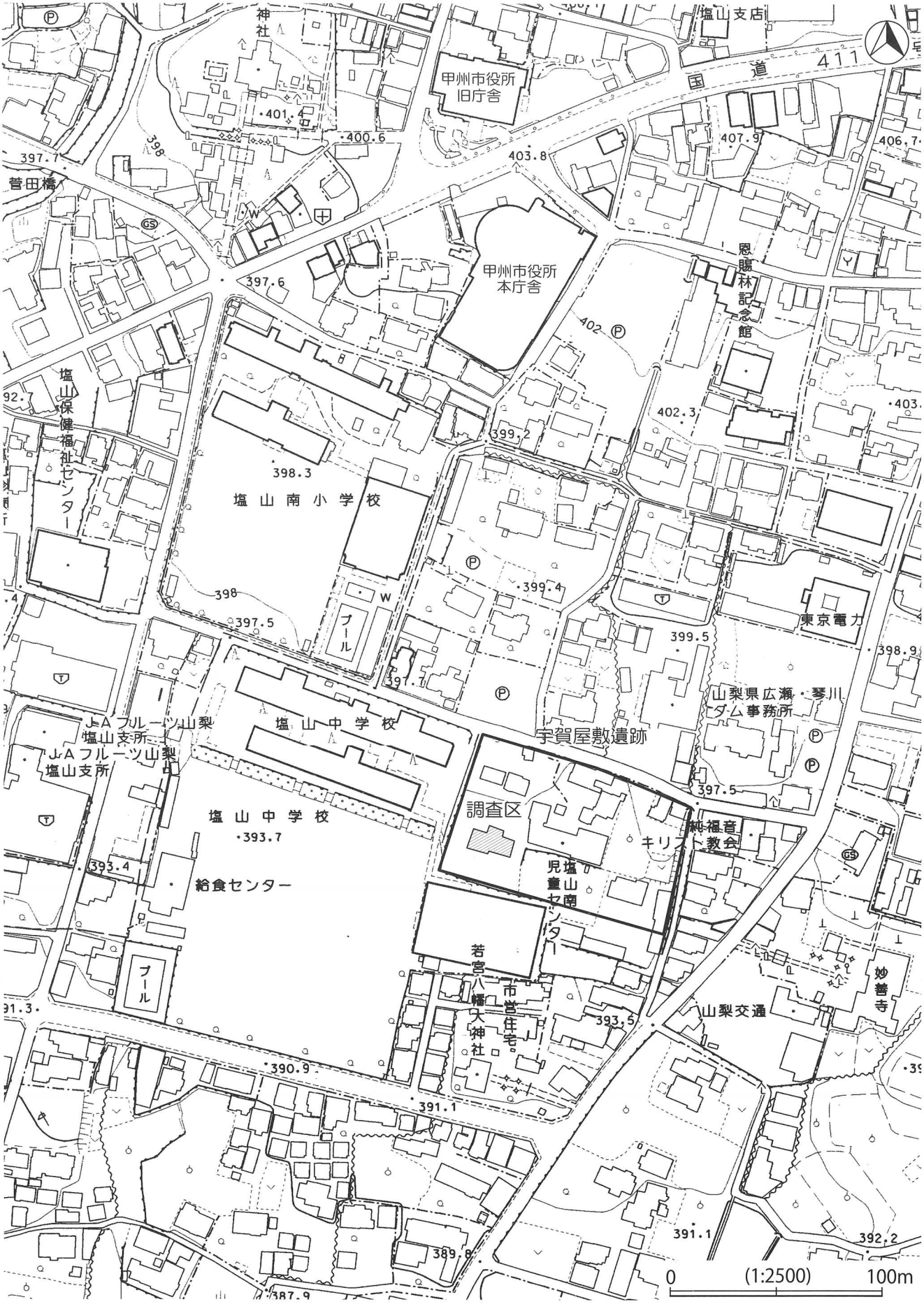
【参考文献】

清雲俊元 1986「黒川金山と土豪屋敷」『山梨県の中世城館跡』山梨県教育委員会
山梨県教育委員会 1991『獅子之前遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 61 集
山梨県教育委員会 1997『一ノ坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 141 集
山梨県 1998『山梨県史　資料編 1　原始・古代 1　考古（遺跡）』
塩山市史編さん委員会 1999『塩山市史　通史編　上巻』
山梨県教育委員会 2002『五反田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 194 集
山梨県教育委員会 2002『下西畑遺跡　西畑遺跡　影井遺跡　保坂家屋敷墓』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 196 集
山梨県教育委員会 2003『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 205 集
（財）山梨文化財研究所ほか 2012『梶畑Ｂ遺跡』甲州市文化財調査報告書　第 10 集

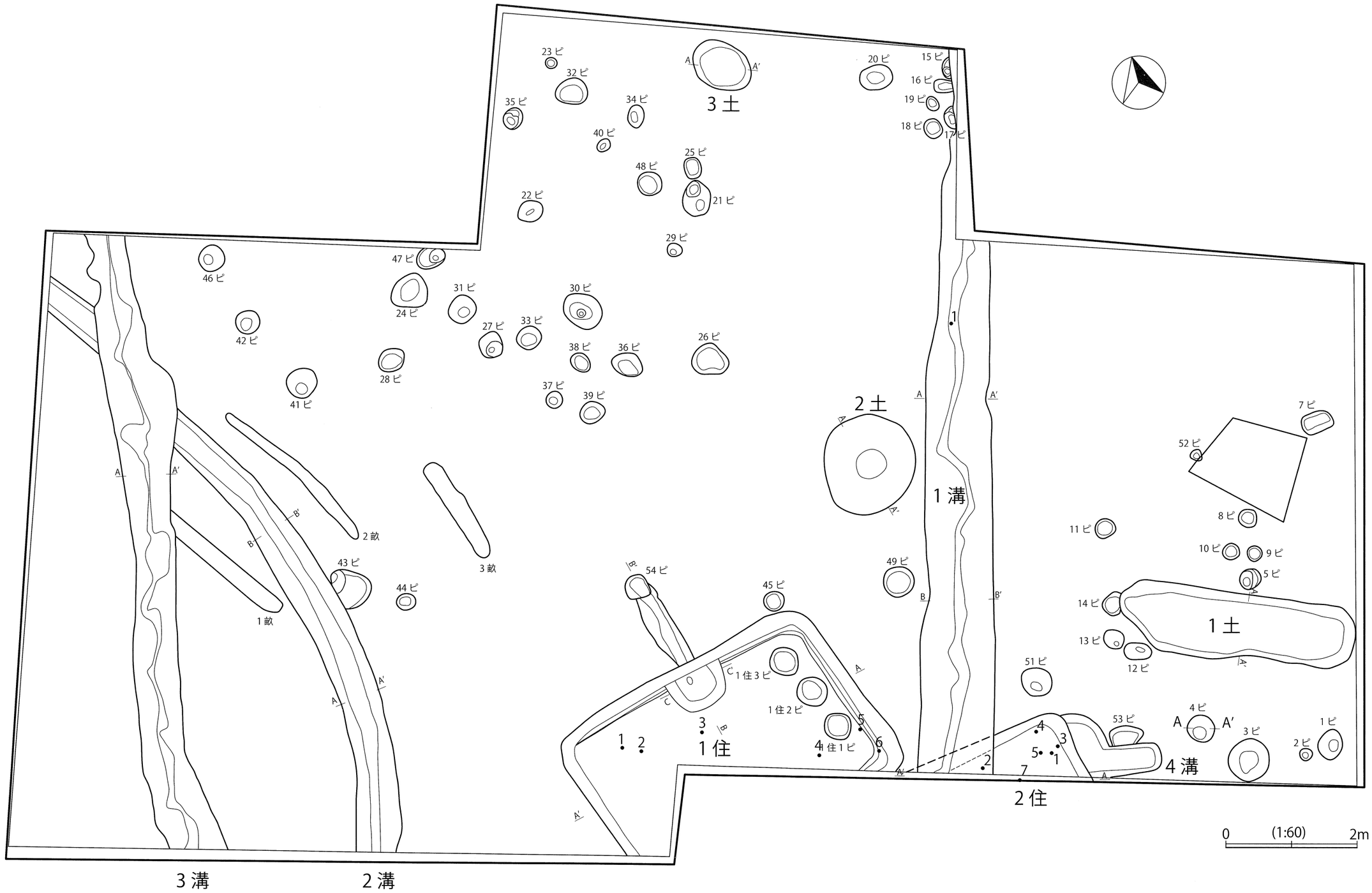
第１図　宇賀屋敷遺跡と周辺の遺跡

第１表　周辺遺跡一覧表

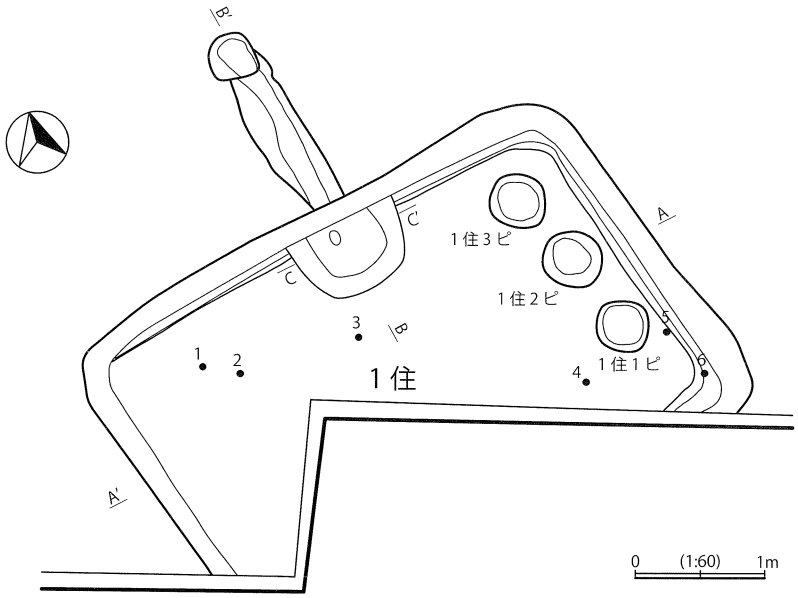
番号	遺跡名	種別	所在地	時期
1	宇賀屋敷遺跡	集落跡	下於曽	奈良・平安・中世
2	宇賀屋敷	城館跡	下於曽	
3	池田氏屋敷	城館跡	下於曽	中世
4	菅田天神社遺跡	散布地	上於曽	縄文
5	於曽屋敷	城館跡	下於曽	
6	於曽屋敷遺跡	城館跡	下於曽	平安・中世
7	簀板遺跡	散布地	下於曽	中世
8	神之木遺跡	散布地	下於曽	縄文・古墳・平安
9	林際遺跡	散布地	下於曽	縄文・平安・中世
10	天神原遺跡	散布地	下於曽	縄文・平安
11	西畑Ａ遺跡	散布地	赤尾	平安・中世
12	保坂氏屋敷	城館跡	赤尾	
13	西畑Ｂ遺跡	散布地	赤尾	縄文・中世
14	下西畑遺跡	散布地	赤尾	縄文・弥生・古墳
15	八代氏屋敷	城館跡	赤尾	
16	宮沢遺跡	散布地	赤尾	縄文・古墳・平安
17	久保田遺跡	散布地	赤尾・下於曽	平安
18	横堰遺跡	散布地	赤尾	中世
19	影井遺跡	散布地	下於曽	縄文・平安
20	池田遺跡	散布地	赤尾	中世
21	横井・大木戸遺跡	散布地	熊野・下於曽	平安
22	五反田遺跡	散布地	熊野	古墳
23	石骨Ｂ遺跡	散布地	熊野	
24	石骨Ａ遺跡	散布地	熊野	縄文・平安
25	熊野八反田遺跡	散布地	熊野	平安
26	下整田遺跡	散布地	熊野	縄文
27	滝ヶ上遺跡	散布地	西野原	縄文
28	西ノ原の堡	城館跡	西野原	中世
29	坂之上・后畑遺跡	散布地	熊野	平安
30	ケカチ遺跡	散布地	熊野	古墳・平安
31	三山塚	塚	熊野	
32	依田兵部左衛門屋敷	城館跡	熊野	中世
33	深沢氏屋敷	城館跡	熊野	
34	熊野前田遺跡	散布地	熊野	平安
35	中道遺跡	散布地	熊野	平安
36	熊野神社遺跡	散布地	熊野	弥生・古墳
37	西田遺跡	集落跡	熊野・西広門田	縄文～奈良
38	東田遺跡	集落跡	西広門田	縄文・古墳
39	芦原田遺跡	散布地	西広門田	縄文・古墳
40	西堀遺跡	散布地	西広門田	平安
41	住蓮木平遺跡	散布地	下塩後	平安
42	村北遺跡	散布地	西広門田	奈良・平安
43	一ノ坪遺跡	散布地	熊野	縄文・平安
44	梶畑Ａ遺跡	散布地	熊野	古墳・奈良・平安
45	梶畑Ｂ遺跡	集落跡	下於曽・熊野	縄文・古墳・平安
46	下於曽八反田遺跡	散布地	下於曽	平安
47	風間氏屋敷	城館跡	下於曽	
48	正泉Ａ遺跡	散布地	下於曽	古墳・平安
49	正泉Ｂ遺跡	散布地	下於曽	
50	中村氏屋敷	城館跡	下於曽	
51	桧遺跡	散布地	下於曽	縄文
52	受地遺跡	散布地	下於曽	平安
53	依田宮内左衛門屋敷	城館跡	下於曽	中世
54	田辺氏屋敷	城館跡	下於曽	中世
55	向原遺跡	散布地	下塩後・西広門田	奈良・平安
56	扇田Ｂ遺跡	散布地	下於曽・西広門田	奈良・平安
57	扇田Ａ遺跡	散布地	下於曽・西広門田	縄文
58	町田遺跡	集落跡	下於曽	縄文
59	扇田Ｃ遺跡	散布地	下於曽・西広門田	縄文・奈良・平安
60	十王前遺跡	散布地	下塩後	平安
61	髪切塚	塚	下塩後	中世・近世
62	薬師平遺跡	散布地	下塩後	
63	清水田遺跡	散布地	下於曽	奈良・平安
64	道替遺跡	散布地	上於曽	弥生・古墳
65	知光田遺跡	散布地	上塩後・下塩後	
66	上塩後境遺跡	散布地	下塩後	
67	おせん稲荷塚	塚	下塩後	
68	稲荷林遺跡	散布地	上塩後	
69	おまん稲荷塚	塚	上塩後	
70	宮之前遺跡	散布地	上塩後	
71	清水尻遺跡	散布地	上塩後	縄文・古墳・平安
72	鈴の宮塚	塚	上塩後	
73	千手院前遺跡	散布地	上塩後	縄文
74	高林遺跡	散布地	上塩後	縄文・中世
75	塩山前遺跡	散布地	上塩後	縄文
76	金山遺跡	散布地	上井尻	平安・中世・近世
77	青木沢遺跡	散布地	上井尻	
78	向嶽寺大方丈跡	社寺跡	上於曽	近世
79	向嶽寺庭園	社寺跡	上於曽	近世
80	腰巻遺跡	散布地	三日市場	縄文・近世
81	腰越遺跡	散布地	三日市場	
82	中原遺跡	散布地	三日市場	縄文・平安
83	青田Ｂ遺跡	散布地	千野	縄文・平安
84	青田Ａ遺跡	散布地	千野	平安
85	村田氏屋敷	城館跡	千野	中世
86	八桑田西遺跡	散布地	千野	縄文・平安
87	札之辻東Ａ遺跡	散布地	千野	平安
88	札之辻東Ｂ遺跡	散布地	千野	縄文・平安
89	観音堂東遺跡	散布地	千野	縄文・平安
90	武田信春館跡	城館跡	千野	中世
91	小山平南遺跡	散布地	千野	縄文・平安
92	獅子之前遺跡	集落跡	千野	縄文・弥生・平安
93	古屋清左衛門屋敷	城館跡	千野	
94	梅ノ木遺跡	散布地	上於曽	
95	梅ノ木塚	塚	上於曽	
96	お文殊稲荷塚	塚	上於曽	
97	橋爪氏屋敷	城館跡	上於曽	
98	於曽三郎屋敷	城館跡	上於曽	
99	相ノ田遺跡	散布地	赤尾	縄文・古墳・平安
100	赤尾堰口堤防	堤防	赤尾	近代
101	御嶽前田遺跡	散布地	下粟生野	縄文
102	洗在家遺跡	散布地	下粟生野	縄文・平安
103	牛久保遺跡	散布地	上粟生野	
104	平城	城館跡	下萩原	
105	南畑遺跡	散布地	下萩原	弥生

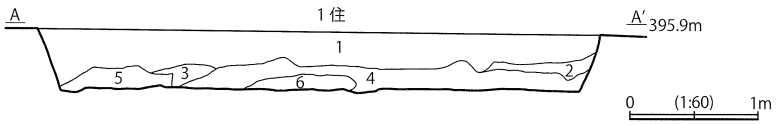

塩山支店
国道411
神社
甲州市役所旧庁舎
甲州市役所本庁舎
恩賜林記念館
菅田橋
塩山保健福祉センター
塩山南小学校
プール
東京電力
山梨県広瀬・琴川ダム事務所
宇賀屋敷遺跡
調査区
JAフルーツ山梨塩山支所
塩山中学校
給食センター
キリスト教会
児童センター
若宮八幡大神社
市営住宅
山梨交通
妙善寺
0 (1:2500) 100m

第２図　調査区位置図



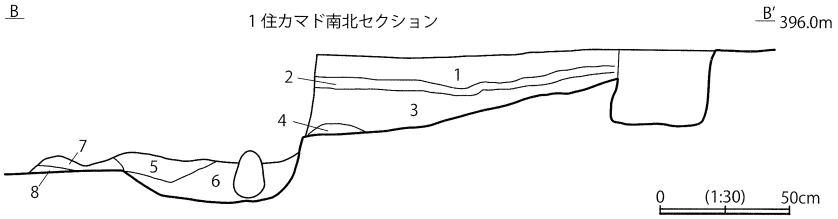
第3図　遺構配置図





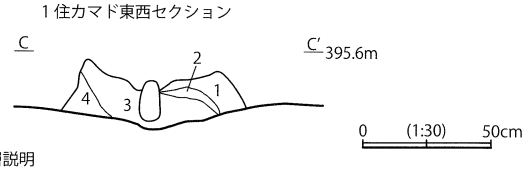
1住土層説明

1．暗黄褐色土層　しまり強い、粘性あり、ロームブロックを多く含む、焼土粒微量含む、白色粒子（砂？）微量含む。
2．黒褐色土層　しまり強い、粘性あり、ロームブロックを含む。
3．黒褐色土層　しまり強い、粘性あり、ロームブロック少量含む。
4．暗黄褐色土層　しまり強い、粘性強い、ロームブロックを多く含む。
5．暗黄褐色土層　しまり強い、粘性強い、ロームブロックを多く含む。
6．暗褐色土層　しまり強い、粘性あり、ロームブロック含む。



土層説明

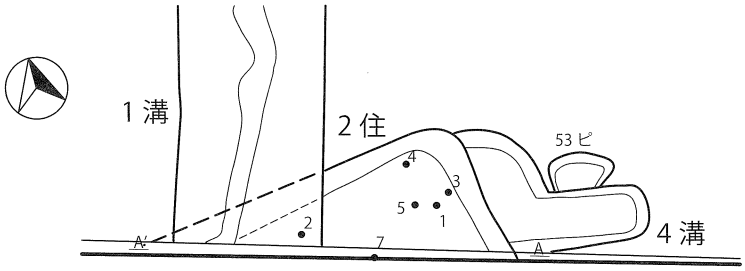
1．暗褐色土層　しまりあり、粘性あり、ローム粒含む、焼土粒微量含む。
2．暗赤褐色土層　焼土層。しまりあり、粘性あり。
3．暗褐色土層　しまりやや弱い、粘性あり、焼土粒微量含む。
4．明赤褐色土層　焼土層。しまりあり、粘性あり、暗灰褐色土含む。
5．暗灰褐色土層　しまりあり、粘性あり、焼土粒微量含む。
6．暗赤褐色土層　しまりあり、粘性あり、焼土粒多量、炭化粒含む。
7．明赤褐色土層　焼土層。しまりあり、粘性あり。
8．暗灰褐色土層　しまりあり、粘性あり、焼土粒微量含む。

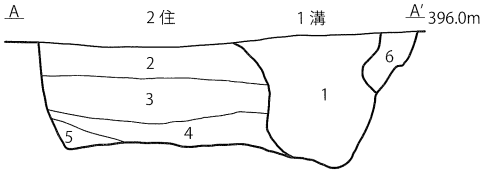


土層説明

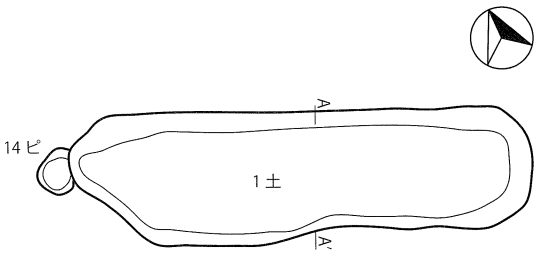
1．明赤褐色土層　焼土層。しまりあり、粘性あり、暗灰褐色土含む。
2．暗褐色土層　しまりあり、粘性あり、ローム粒多量含む。
3．暗赤褐色土層　しまりあり、粘性あり、焼土粒多量、炭化粒含む。
4．暗褐色土層　しまりあり、粘性あり、ローム粒多量含む。

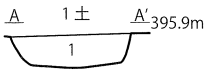
第４図　１号住平面図・断面図



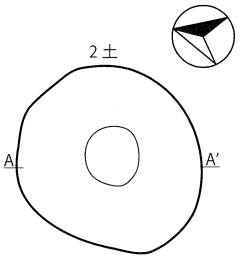


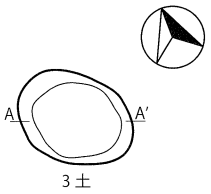
2住土層説明
1．暗褐灰色土層　1号溝覆土。砂質。しまりややあり、粘性ややあり。ローム粒微量含む。
2．黒褐色土層　しまりあり、粘性あり、ローム粒・焼土粒微量含む。
3．暗褐灰色土層　しまりあり、粘性あり、ローム粒含む。
4．暗褐灰色土層　しまりあり、粘性あり、ロームブロックを多く含む。
5．暗褐灰色土層　しまりあり、粘性あり、炭化粒微量含む。
6．3層に似る。

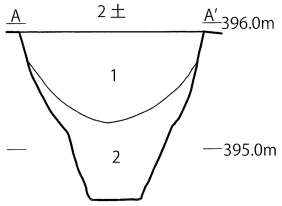


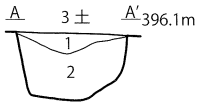


1土土層説明
1．暗褐色土層　しまりあり、粘性あり、ローム粒やや多く含む。







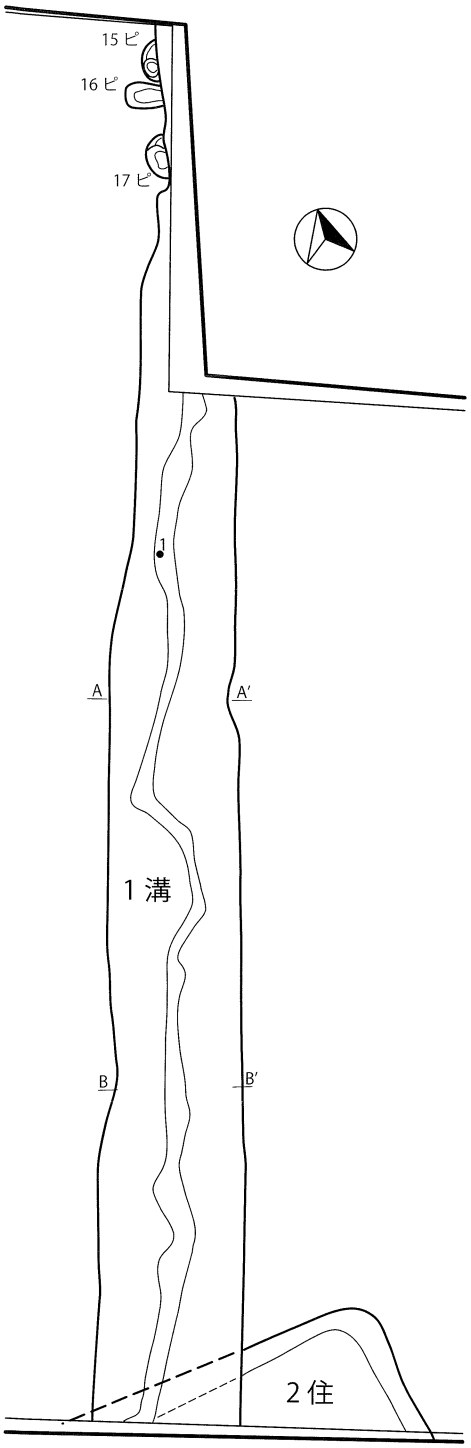


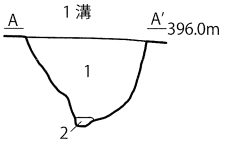
2土土層説明
1．黒褐色土層　しまりあり、粘性あり、ロームブロックを多く含む。
2．黒褐色土層　しまり強い、粘性強い。底面付近で砂礫を少量含む。

3土土層説明
1．暗褐色土層　しまり強い、粘性あり、砂粒を少量含む。
2．暗黄褐色土層　しまり強い、粘性強い、砂粒を少量含む、焼土粒微量含む。

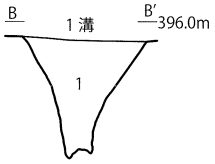
0　(1:60)　1m

第5図　2号住、1号土坑、2号土坑、3号土坑平面図・断面図

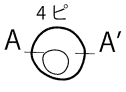


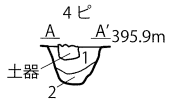


1溝A-A′土層説明
1．暗褐灰色土層　砂質。しまりややあり、
粘性ややあり。ローム粒微量含む。
2．灰褐色砂層　しまり弱い、粘性弱い、
細かい砂礫により構成される。



1溝B-B′土層説明
1．暗褐灰色土層　砂質。しまりややあり、
粘性ややあり。ローム粒微量含む。

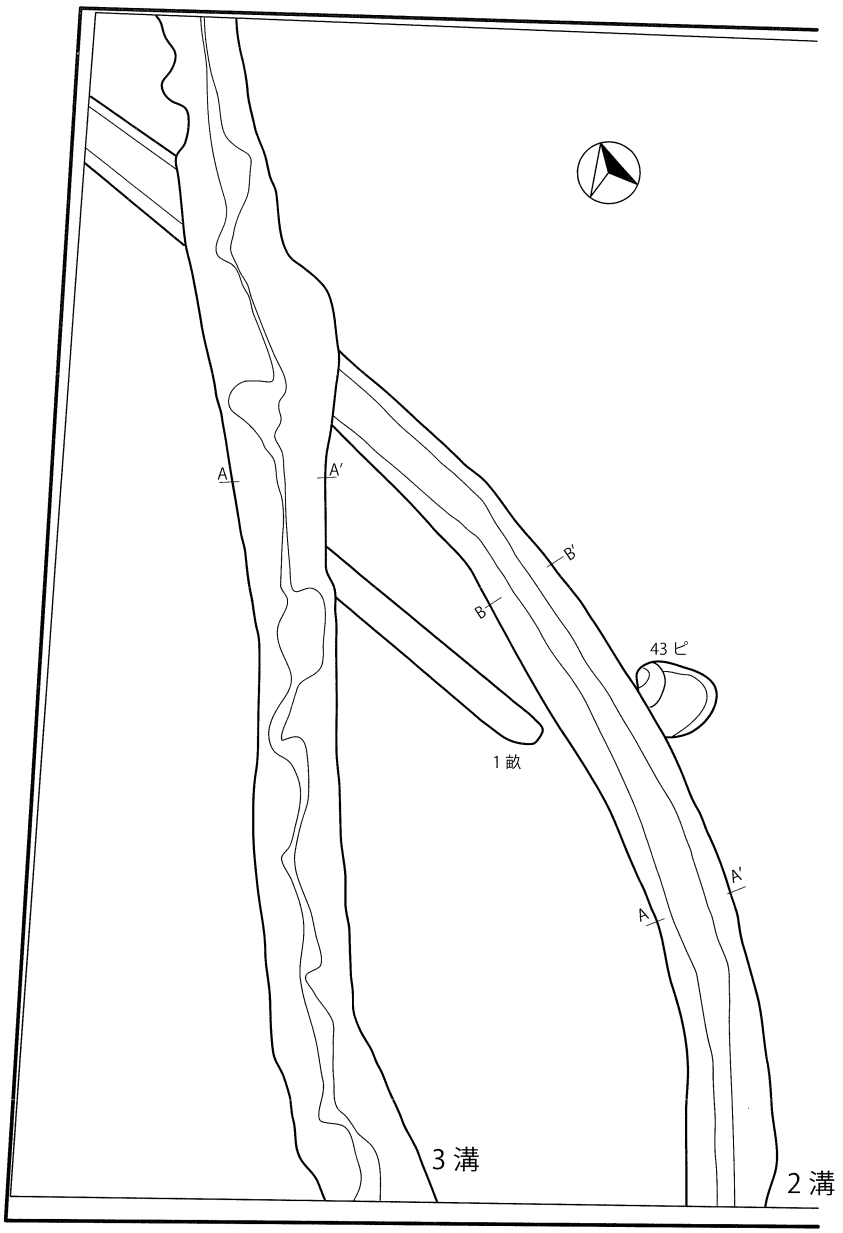


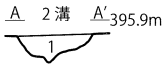


4ピ土層説明
1．黒褐色土層　しまりあり、粘性あり、ローム粒少量含む。
2．暗褐色土層　しまりあり、粘性あり、ローム粒少量含む。

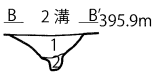
0　(1:60)　1m

第６図　１号溝、４号ピット平面図・断面図

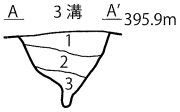




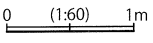
2溝A-A′ 土層説明
1．暗褐色土層　しまりあり、粘性あり。



2溝B-B′ 土層説明
1．暗褐色土層　しまりあり、粘性あり。
　　ローム粒少量含む。
2．暗灰褐色土層　しまりあり、粘性弱い、
　　ロームブロック少量含む。



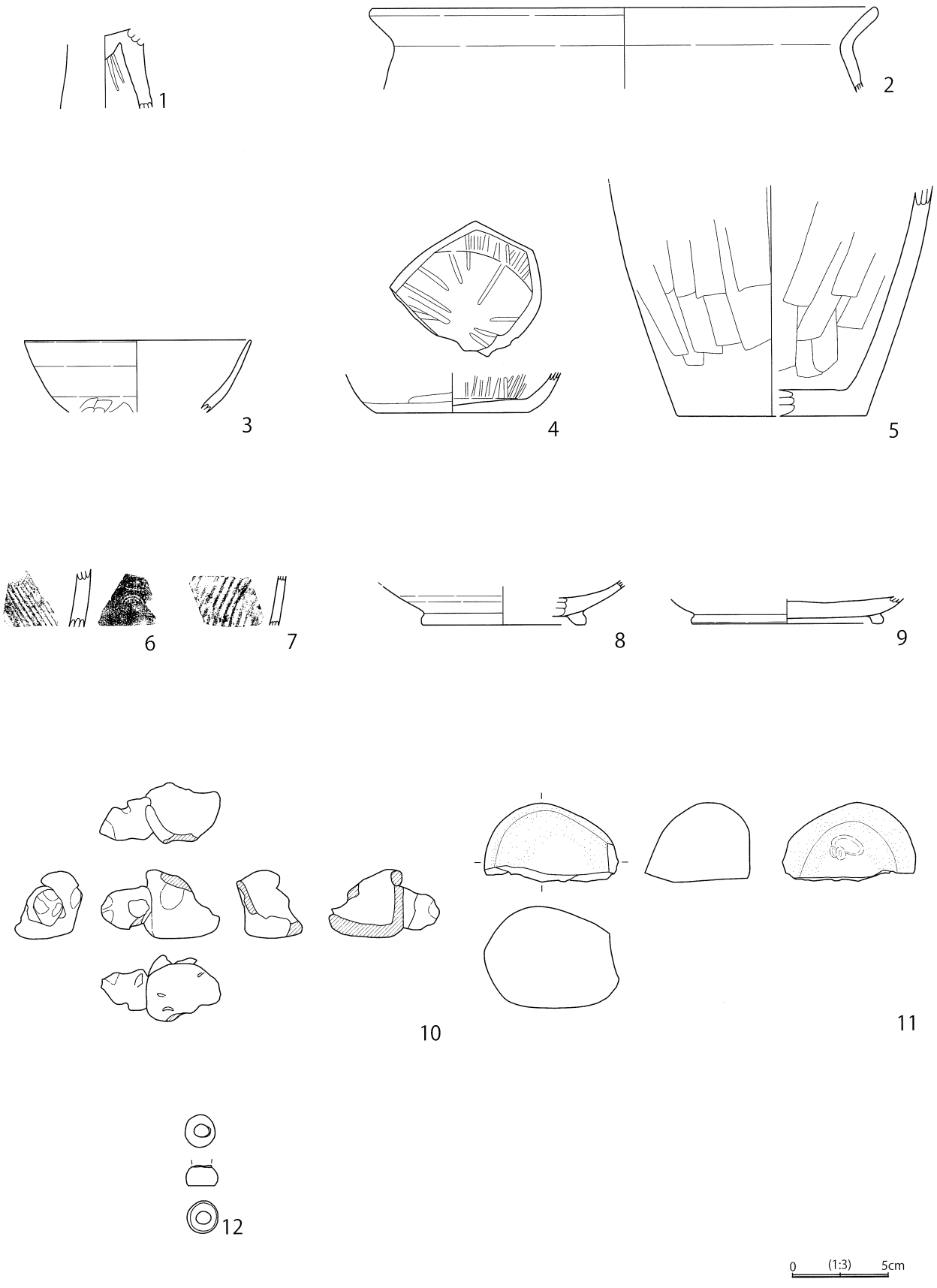
3溝土層説明
1．暗褐灰色土層　砂質。しまりあり、粘性あり、
　　ローム粒微量含む。
2．暗褐灰色土層　砂質。しまりややあり、粘性あり、
　　ローム粒微量含む。１層よりやや明るい。
3．暗褐灰色土層　砂質。しまりややあり、粘性あり、
　　ローム粒少量含む。



第７図　２・３号溝平面図・断面図

第２表　ピット一覧表

遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
1 号ピット	楕円形	46	37	21	
2 号ピット	円形	19	18	7	
3 号ピット	円形	65	61	27	
4 号ピット	円形	42	41	32	
5 号ピット	円形	32	31	23	
6 号ピット	-	-	-	-	欠番
7 号ピット	楕円形	47	31	13	
8 号ピット	円形	28	27	15	
9 号ピット	円形	23	21	13	
10 号ピット	円形	26	25	11	
11 号ピット	不整円形	31	28	12	
12 号ピット	楕円形	42	25	50	
13 号ピット	円形	33	29	50	
14 号ピット	不整円形	36	29	32	
15 号ピット	楕円形	32	-	14	
16 号ピット	楕円形	-	20	28	
17 号ピット	楕円形	33	-	19	
18 号ピット	円形	30	26	22	
19 号ピット	円形	23	18	25	
20 号ピット	楕円形	50	38	49	
21 号ピット	不整楕円形	55	42	23	
22 号ピット	不整円形	40	33	11	
23 号ピット	円形	17	16	46	
24 号ピット	不整円形	58	51	22	
25 号ピット	楕円形	32	25	12	
26 号ピット	不整円形	53	48	20	
27 号ピット	不整円形	40	37	59	
28 号ピット	不整円形	43	34	24	
29 号ピット	円形	23	19	48	
30 号ピット	不整円形	63	50	31	
31 号ピット	不整円形	43	37	48	
32 号ピット	不整楕円形	49	40	31	
33 号ピット	不整円形	35	35	30	
34 号ピット	楕円形	35	24	30	
35 号ピット	楕円形	33	28	50	
36 号ピット	不整楕円形	49	36	28	
37 号ピット	円形	26	24	22	
38 号ピット	楕円形	32	26	26	
39 号ピット	不整楕円形	39	33	19	
40 号ピット	楕円形	22	16	29	
41 号ピット	円形	47	44	46	
42 号ピット	円形	37	36	35	
43 号ピット	不整楕円形	65	-	30	
44 号ピット	円形	29	25	16	
45 号ピット	円形	31	30	20	
46 号ピット	円形	41	38	41	
47 号ピット	楕円形	45	32	43	
48 号ピット	円形	36	36	27	
49 号ピット	円形	47	46	21	
50 号ピット	-	-	-	-	欠番
51 号ピット	円形	50	44	38	
52 号ピット	不整円形	19	17	13	
53 号ピット	不整楕円形	51	-	20	
54 号ピット	不整円形	39	35	29	１住を切る



第８図　出土遺物実測図

第３表　遺物一覧表

土器観察表

図	地点	番号	種別	器種	法量 (cm)			調整	色調	胎土	残存率	注記	備考
					口径	器高	底径						
8	遺構外	1	土師器	高坏	-	(4.2)	-	外ヘラミガキ、内ヘラケズリ	明橙色	黒・赤・白色粒子	20%	ウガ面上	脚部
8	2 号住	2	土師器	甕	(26.6)	(4.3)	-	外ナデ、内ナデ	褐色	黒・白色粒子	10%	ウガ 2 住No. 7	口縁
8	1 号住	3	土師器	坏	(13.0)	(3.8)	-	外ナデ、ヘラケズリ、内ナデ	赤褐色	黒・赤色粒子	20%	ウガ 1 住	口縁～胴部
8	2 号住	4	土師器	坏	-	(2.1)	(8.0)	外ミガキ、内ミガキ	赤褐色	赤・黒色粒子	30%	ウガ 2 住No. 1	底部～胴部
8	4 号ピット	5	土師器	甕	-	(12.2)	(10.0)	外・内ヘラケズリ	暗赤褐色	雲母・白・黒色粒子	20%	ウガ 4 ピNo. 1	底部～胴部
8	2 号溝	6	須恵器	甕	-	-	-	外・内タタキ	暗灰褐色	黒色粒子	小片	ウガ 2 ミゾ	胴部
8	遺構外	7	須恵器	甕	-	-	-	外・内タタキ	灰褐色	黒色粒子	小片	ウガ面上	胴部
8	3 号溝	8	灰釉陶器	埦	-	(2.1)	(8.4)	外・内ナデ	灰褐色	黒色粒子	10%	ウガ 3 ミゾ下層	底部～胴部
8	遺構外	9	灰釉陶器	坏	-	(1.3)	(10.0)	外・内ナデ	灰褐色	黒色粒子	15%	ウガ面上	底部

土製品観察表

図	地点	番号	器種	法量 (cm)			色調	胎土	注記	備考
				長さ	幅	高さ				
8	1 号住	10	手づくね土器？	(6.1)	(3.6)	(3.6)	暗赤褐色	雲母・白色粒子	ウガ 1 住カマドNo. 1	

石器観察表

図	地点	番号	器種	法量 (cm)			石材	注記	備考
				長さ	幅	厚さ			
8	1 号住	11	磨石	(4.2)	7.0	5.4	花崗岩	ウガ 1 住No. 6	

金属製品観察表

図	地点	番号	法量 (cm)			材質	備考
			長さ	幅	高さ		
8	遺構外	12	1.7	1.6	(1.1)	銅	仏具？

調査区全景（東から）

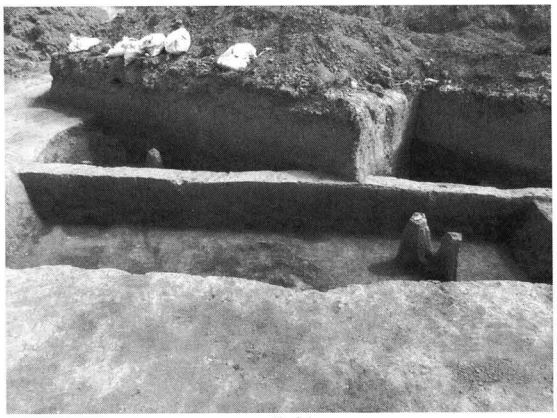
調査区全景（西から）

写真図版２

遺構検出作業風景

遺構検出状況

遺構検出状況

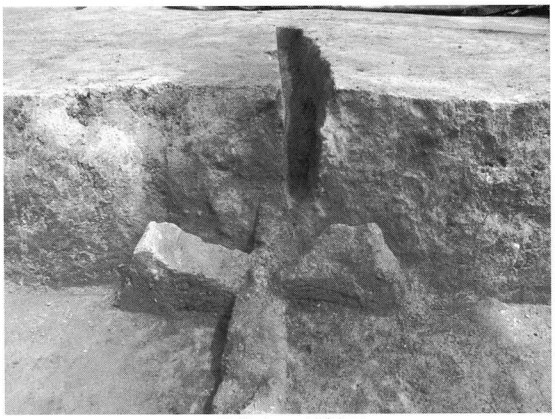


１号住断面

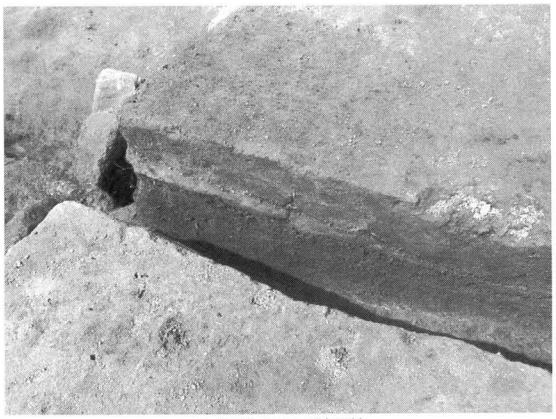
作業風景

１号住遺物検出状況

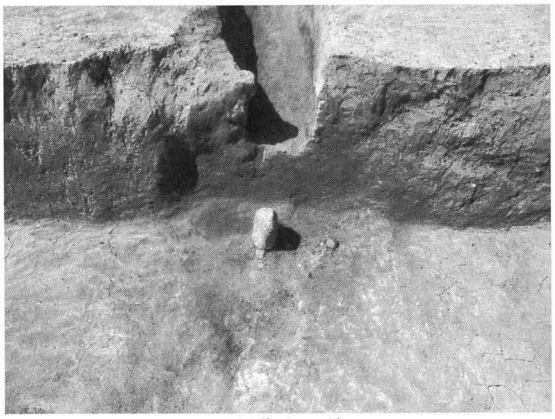
１号住カマド断面



１号住カマド断面



１号住カマド煙道



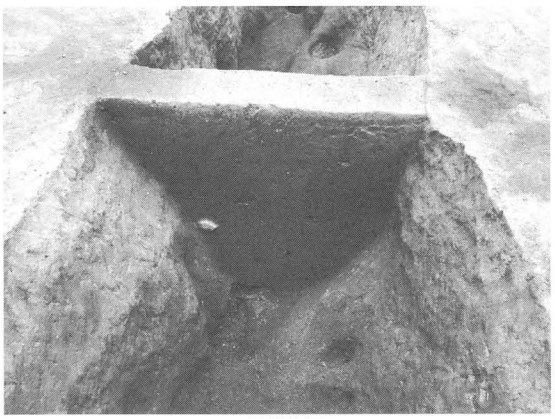
１号住カマド

１号住カマド土製品出土状況

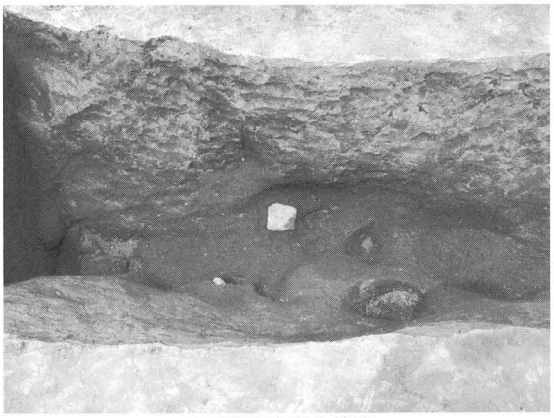
１号住完掘

２号住完掘

1 号溝調査風景



1 号溝断面



1 号溝遺物出土状況

1 号溝断面

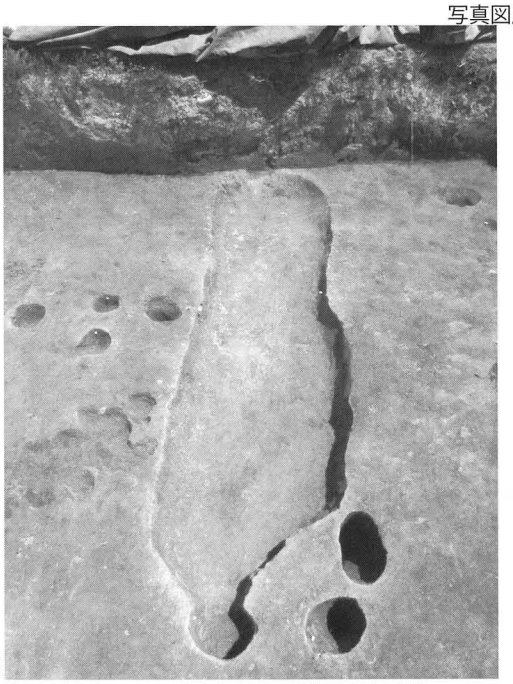
1 号溝遺物出土状況

写真図版６

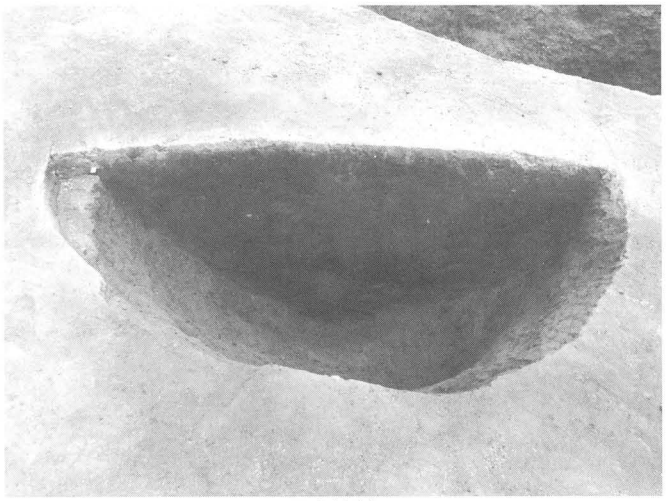
１号溝完掘

２・３号溝完掘

１号土坑断面



１号土坑完掘



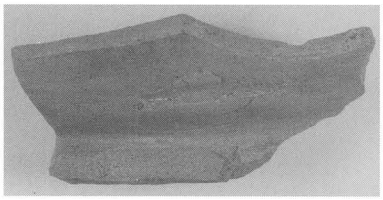
２号土坑断面

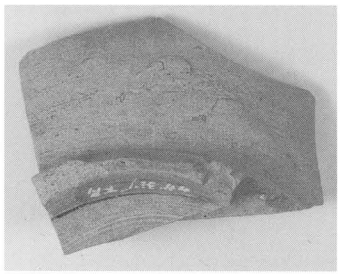
２号土坑完掘

４号ピット遺物出土状況

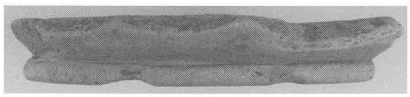
写真図版８

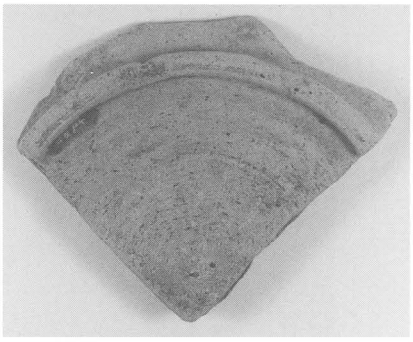
調査風景



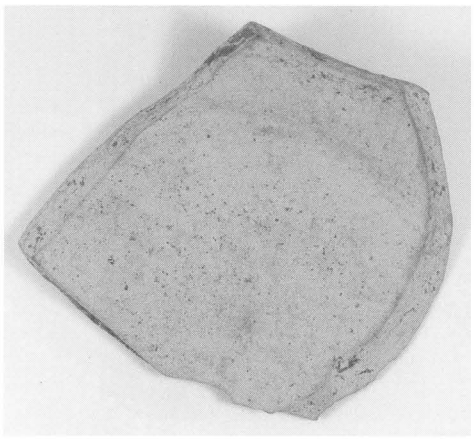


第８図８



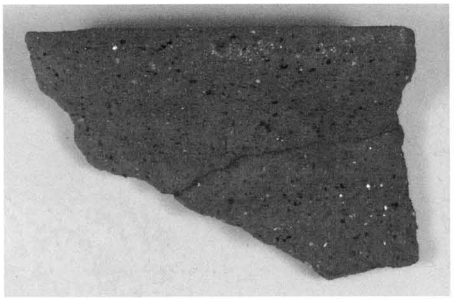


第８図９

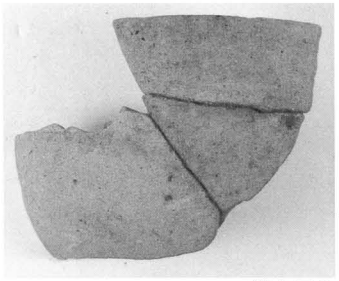


第８図４

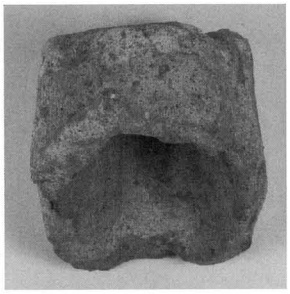
第８図５

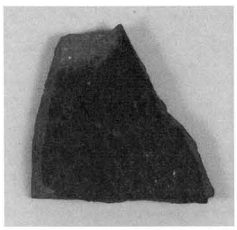


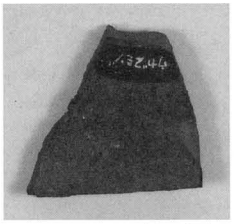
第８図２



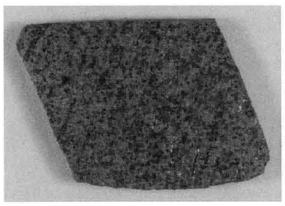
第８図３



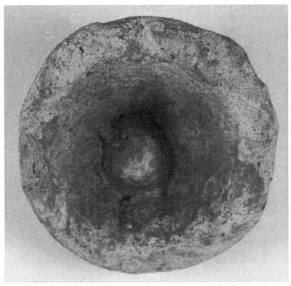




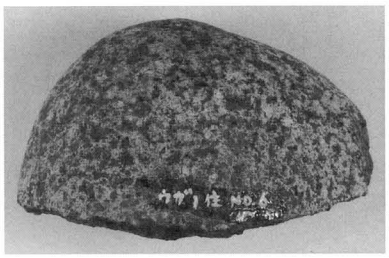
第８図６

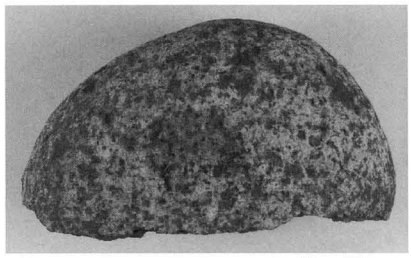


第８図７

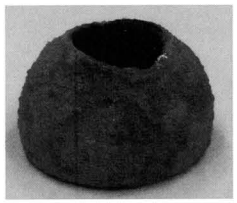


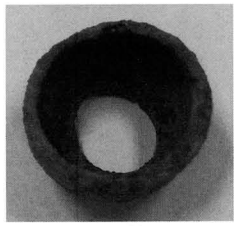
第８図１



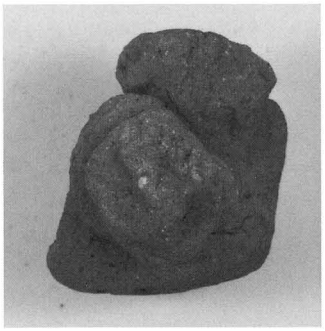


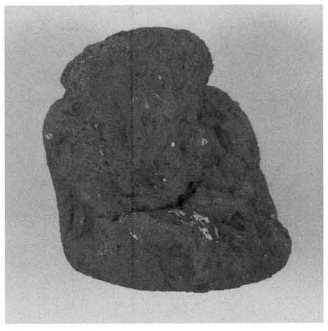
第８図１１



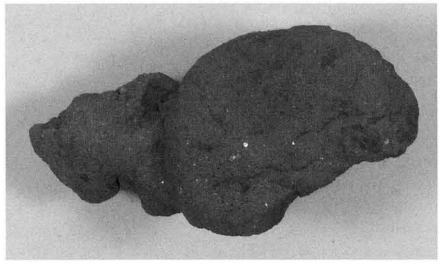


第８図１３





第８図１０



報 告 書 抄 録

ふりがな	うがやしきいせき
書名	宇賀屋敷遺跡
副書名	個人住宅建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	甲州市文化財調査報告書
シリーズ番号	第13集
編著者名	入江俊行
編集機関	甲州市教育委員会
所在地	〒404-8501　山梨県甲州市塩山上於曽1085-1　電話0553-32-5097
発行年月日	平成25年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
うがやしきいせき 宇賀屋敷遺跡	こうしゅうしえんざんしもおぞ 甲州市塩山下於曽 あざうがやしき 字宇賀屋敷1026 ばん 番4	19213	塩47	35°42′7″	138°43′45″	平成23年4月12日～5月31日	約216㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇賀屋敷遺跡	集落跡	平安・中世	竪穴住居跡・溝・土坑・畝状遺構・小穴	土師器・須恵器・灰釉陶器・陶器・石器・銅製品	長い煙道をもつ竪穴住居跡を検出。

要　約

調査の結果、竪穴住居跡2軒、溝4本、土坑3基、畝状遺構3本、小穴51基が検出された。今回発見された遺構は、隣接する塩山南児童センター地点で発見された集落の一部に含まれると考えられる。出土遺物の年代からも矛盾は生じない。また、畝状遺構の主軸方向が住居の主軸ともかなり近いことから、これも集落が営まれた時期と同時期のものと推定される。

1号溝は、2号住居を破壊して構築される。住居跡との主軸方向の相違や覆土の性質、また出土遺物の年代から、集落が営まれた時期よりも新しいものと考えられる。そして、1号溝と類似する3号溝も1号溝と近い時期の所産であろう。1号溝の底面からは常滑産の甕の破片が出土していることから、少なくとも1号溝が埋め戻された時期が中世以降と考えられ、平安期の集落が廃絶し、中世に入ると土地利用の改変が行われたものと推察される。

当該地の字名は宇賀屋敷と呼び、その周囲は於曽屋敷、田辺氏屋敷、風間氏屋敷など中世城館に囲まれている環境にある。今回発見された遺構は、館が発生する以前に集落が営まれ、その後、城館跡に変化していくことを物語る重要な発見であったといえる。

山梨県甲州市
宇賀屋敷遺跡
―個人住宅建設に伴う発掘調査報告書―
2013
編集　甲州市教育委員会　生涯学習課
山梨県甲州市塩山上於曽1085-1
0553-32-5097
発行　甲州市教育委員会
平成25年3月31日
印刷　株式会社　峡南堂印刷所

甲州市文化財報告書　第13集

宇賀屋敷遺跡

二〇一三年三月

甲州市教育委員会